戦後６０年・市制施行３５周年記念

戦後６０年の願い

～私たちの記憶の中の戦争～

新座市健康平和都市宣言

“にいざ”って　どんなまち　さわやかな風が息吹き
楽しい語らいが聞こえ　笑顔のあふれるまち
わたしたちは　緑にいこい
すこやかな心とからだ　育てます
平和を愛し　自由で明るいまち　築きます
ふれあいを大切に　協力と助け合い　広げます

そして　こどもたちに　バトンタッチ
健康で平和な　住み良いまちを

昭和６３年６月４日

はじめに

今年は、戦後６０年という歴史上の節目の年に当たります。

６０年という月日が流れる中で、戦争は、次第に私たちの記憶の中から薄れ、時代の流れとともに、少しずつ私たちの日常生活から遠い存在になっています。しかし、戦争は決して忘れてはならない私たちの“記憶”なのです。

そこで、戦後６０年に当たる今年、戦争に対する思いを改めて心に刻み込み、二度とこのような悲惨な過ちを繰り返さないために、実際に戦争を体験した皆様の声や平和へのメッセージ等をまとめた記録集「戦後６０年の願い～私たちの記憶の中の戦争～」を作成しました。

皆様からお寄せいただいた体験記には、身につまされる多くの悲惨な体験が語られています。“その心の傷跡は、戦後６０年経った今日でも消えることはない”ということを痛感します。また、平和へのメッセージや短歌、俳句からは、幅広い世代の皆様からの平和を願う熱い思いが伝わってきます。

この記録集が、後世に語り継いでいく平和への道しるべとなり、私たち一人ひとりの平和を愛する気持ちが世界中に広がっていくことを願ってやみません。

最後になりましたが、この記録集をまとめるに当たり、辛い体験を思い出し、語ってくださった皆様、また、平和への切なる願い、熱い思いをメッセージや短歌、俳句に込めてお寄せいただいた皆様に、改めて感謝を申し上げます。

平成１７年１２月

新座市長　須田健治

目次

はじめに

Ⅰ　戦争体験記

- 浦川　敏満 …… 1
- 奥田　正一 …… 5
- 木村　光雄 …… 8
- 小泉　茂 …… 11
- 斉藤　喜作 …… 13
- 佐伯　信亮 …… 16
- 児玉　孝一 …… 19
- 田中　定一 …… 23
- 出嶋　輝子 …… 26
- 保坂　正夫 …… 27

Ⅱ　メッセージ

- 陳　萍 …… 29
- 浦川　未早　（中学２年生）…… 30
- 斉藤　のどか　（中学２年生）…… 30
- 鈴木　千陽　（小学２年生）…… 31
- 石岡　大昌　（小学３年生）…… 32
- 斉藤　勇大　（小学３年生）…… 32
- 武本　明花里　（小学３年生）…… 33
- 山本　夏寧　（小学３年生）…… 33
- 福島　翔　（小学４年生）…… 34
- 三代澤　憲伸　（小学４年生）…… 34
- 弓座　まなつ　（小学４年生）…… 35

Ⅲ　俳句

- 池谷　英夫 …… 37
- 石原　恵美子 …… 37
- 浦川　宏志 …… 37
- 大沢　志織 …… 37
- 鯉川　武英 …… 37

・高麗（こま）　実（みのる）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３７
・小山（こやま）　泰子（やすこ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
・下田（しもだ）　セツ子（こ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
・高草木（たかくさき）　一子（かずこ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
・高橋（たかはし）　道子（みちこ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
・田口（たぐち）　正子（せいこ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
・田村（たむら）　もも子（こ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８
・津谷（つや）　謙弌（けんぞう）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
・並木（なみき）　万佐子（まさこ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
・松岡（まつおか）　香月（こうげつ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
・水田（みずた）　一芙（いっぷ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
・山形（やまがた）　れん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３９
・原田（はらだ）　工夢（たくむ）　（小学２年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・石岡（いしおか）　大昌（ひろまさ）　（小学３年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・大塚（おおつか）　淳平（じゅんぺい）　（小学４年生）・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・垣澤（かきざわ）　稚奈（わかな）　（小学４年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・白塚（しらつか）　湧士（ゆうし）　（小学４年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・小澤（おざわ）　昂世（こうせい）　（小学５年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・高橋（たかはし）　柾哉（まさや）　（小学５年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・田所（たどころ）　友洋（ともひろ）　（小学５年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・４０
・岡嶋（おかじま）　裕也（ゆうや）　（小学６年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
・新田（にった）　幸菜（ゆきな）　（小学６年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１
・森田（もりた）　翔平（しょうへい）　（小学６年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・４１

Ⅳ　短歌（たんか）
・小泉（こいずみ）　茂（しげる）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
・小泉（こいずみ）　正平（しょうへい）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３
・並木（なみき）　清子（きよこ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
・伊原（いはら）　凛（りん）　（小学３年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
・齊藤（さいとう）　雄也（ゆうや）　（小学６年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４
・吉野（よしの）　咲（さき）　（小学６年生）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４４

Ⅴ　新座市平和展実施結果（にいざしへいわてんじっしけっか）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５

Ⅰ　戦争体験記

私の戦争体験記

浦川　敏満

今の日本では想像もつかないほど戦争が好きな国であった。昭和２０年８月戦争に敗れ、アメリカの占領下におかれ、民主主義の国に生まれ変わったのである。

そして６０年日本は戦争を知らない国となった。現在ほど平和を謳歌した日本は過去にはなかったのである。しかし、戦後生まれの人たちは戦争の悲惨さを知らない。そのため漫画や読み物の中の戦争を美化したものを目にして、それに憧れる人も少なくない。

私は戦争体験者の一人として、戦争の悲惨さ、醜さなどについて述べたいと思うのである。太平洋戦争に敗れるまでの日本は戦争の連続で、昔は地域ごとの権力争いが繰り返され、元寇の役では博多湾に蒙古軍が攻めてきて、当時の鎌倉幕府がその対応に追われたのである。その後も日清戦争、日露戦争、支那事変その戦いが太平洋戦争へと拡大したのである。

私は、昭和１６年１月満１５歳となり、子どもの頃からの憧れであった陸軍幼年学校に入ることが夢であった。親には内密に願書を出した。無事テストに合格してその年の３月晴れて入隊できた。親の反対は並大抵のものではなかった。

すぐに訓練がはじまり兵隊の卵が生まれたのである。しかし、戦いは日増しに生臭くなり、その年の１２月８日アメリカ、イギリス、中国を相手に宣戦布告をしたのだ。学業半ばで、行く先は知らされないまま船上の人となった。到着したところは、ボルネオ（今のベトナム）敵前上陸だったがほとんど抵抗もなく、スムーズな上陸であった。ただちに南下してシンガポールへと進み、翌年２月ジョホールバールからシンガポール島へ敵前上陸がはじまったのであるが、すさまじい抵抗があり戦友の何人かがこの戦いで戦死した。そのとき私は１６歳。中心部を占領して

約１か月休養して、再び転戦の命令が下り、ビルマ（今のミャンマー）へ。アメリカ映画「戦場に架ける橋」で有名なクワイ河を渡っていよいよビルマへ―。ビルマの戦いは悲惨の一語に尽きる。飢えと疲労と風土病。物資や弾薬の補給はほとんどなく、食料は現地調達であった。人はなぜ人を安易に殺すのだろうか。戦争だから殺すのだろうか。戦争で人を殺しても罪にはならないのか。１６歳の私は大きな矛盾を感じ始めていた。平和のとき人を殺したら犯罪者としてのレッテルを貼られるが、戦争で人を殺したら英雄である。なぜ？同じ人殺しではないのか。

何かが狂っている。と思いつづけた。１８年に陸軍少尉に昇進して部下を持つ身となった。部下のすべては私より１回りも上の人ばかりであった。ビルマは日本と違って四季がなく、１年の半分は雨期で毎日雨ばかり、残りの半分は乾期で、１滴の雨も降らない日が毎日続くのである。

ともかく暑い。喉が渇いて水が欲しくなる。だが、現地の生水は絶対飲めないのだ。

半年も降り続いた雨だからきれいな水だと誰もが思うのだろうが、そこが日本と異なるところである。木の葉などに溜まっている水を飲んだら、猛烈な下痢が始まる。薬など絶対に受け付けない。薬（錠剤）を飲んだら１、２分でそのまま出てくる始末。私もその犠牲者の一人である。敗戦の色が濃くなり、撤退（退却）を余儀なくされたとき、下痢などで行動を共にできない者は、そのまま現地に残された。もし敵に襲撃された場合は自決して欲しい、との命令で各自手榴弾を１個ずつ渡された。私は拳銃をもって、１６名残されてしまった。

食料は飯盒いっぱいの米だけ。幾日生き延びることができるだろう。不安と焦燥と無念さだけがこみ上げてきた。盃１杯の米を重湯にして全員に分配するのだが、その重湯も受け付けない状態である。このまま死を待つだけだろうか。立って歩けなくなる。

ある日の明け方うとうとしていると、枕元に白い着物を着た老婆が静かに私に呼びかけてきた。「そのままだとまもなく死んでしまうぞ！夕べ飯盒炊飯したところに消し炭があるからそれを砕いて飲め」と言って立ち去った。朦朧とした頭で私は消し炭のあるところまで這って行き、その消し炭をむさぼった。するとどうだろう、いままで１０分置きぐらいに用便をしていたのに、ぴたりと止まったではないか。驚きと喜びが重なって全員におなじ方法を講じたのである。それで全員元気を回復して原隊に復帰できたのである。

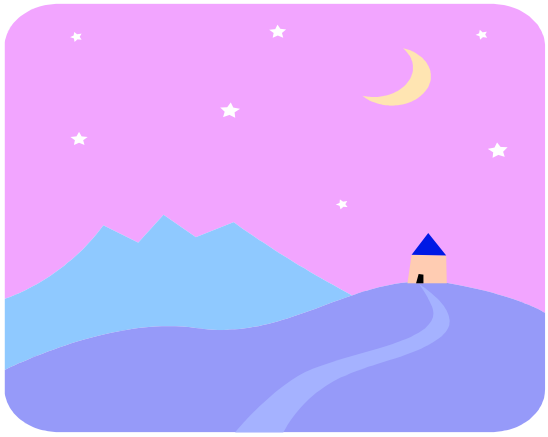
またある朝、点呼の折り、中隊長に報告を終え、訓示を聞いているときに、右側横方から敵に狙撃されたことがあった。当時、私は小隊長として勤務していたので、最前列の１番右にならんでいた。そのとき、朝日に照らされ目に飛び込んできたものは小さな金の観音像であった。「なぜここに金の観音像が…」と思ひ、一瞬つつっと前のめりしたのである。そのとき私の襟筋を弾がかすめて、次に立っていた兵とその次に立っていた兵の首を貫通したのである。一人目の私は無事で二人の兵の命を奪ったのである。金の観音像に見えたのは木片に朝露がたまっていて、それが朝日に反射し私の目には金の観音像として映ったのであったことが解かった。観音像に助けられたのは事実であり、以来６０余年の間必ず月参りを欠かしたことはない。

丸７年の間戦争の真っ只中にいて楽しかったことは何一つもなかった。青春のすべては戦争で失ってしまった。勝っても負けても戦争で得るものはない。あるものは憎しみと死という犠牲と貧困と悲しみだけである。テレビゲームなどで戦いの場面をよく見かけるが現実はあのような生やさしいものではないことを若い人々は自覚していただきたいと思う。飢えと貧困と悲しみと死だけである戦争がいかに無意味なものであるかを再確認し、平和な日本が続くように願いたいものである。日本で始めて味

わう平和の礎を築いた多くの方々の御霊にこの１文をささげ残された私たちが、この平和を守り続ける努力を怠らないようにしたいものである。２年間の捕虜生活（イギリス軍の捕虜）を終えて昭和２２年に復員したのである。

真実の戦争を知ることが平和への道しるべ

この記録は私が体験した太平洋戦争におけるビルマ（現在のミャンマー）での戦場での出来事のほんの一部分です。
機会があったら、また真実の戦争の実態を知っていただきたいと思っています。



日本もアメリカ本土を空襲した

奥田　正一

時は昭和１７年９月、初空襲した模様をまとめてみた。もちろん本人は大和田に生まれ育ち、１７歳にて海軍現役志願、入隊と同時に偵察練習生（予科練の前身）として訓練後、昭和１２年支那事変勃発漢口爆撃に参加、大東亜戦及び昭和１７年９月米国初空襲をなす。そのときの模様は戦後６０年以上も経つとだんだん風化してほとんど聞かれなくなった。そこで、どのような方法で空襲したのかを本人の日記によりまとめてみた。

空襲は潜水艦に搭載できるよう小型で華奢にできていて、もちろんスピードは遅いし、機銃は７．７粍（ミリメートル）の旋回機銃一挺だけの玩具のような飛行機だったが、名称だけは零式小型水上偵察機と呼ばれていた。

ミッドウェー海戦で航空母艦を撃沈され一大打撃を受けた海軍は、戦勢を挽回するため潜水艦搭載飛行機に爆装する研究が進められていた。当時大型潜水艦は伊号として９隻が１機ずつ搭載していた。

まず、最初に爆装されたのは伊２５号の飛行機で、操縦は藤田兵曹、偵察員は奥田二等兵曹の二人乗りで、装備は機銃と無線機だけである。潜水艦の飛行機は巡航１８０粁（キロメートル）、全速力２５０粁（キロメートル）で滞空時間は４時間位のため、どうしても敵地深く入り込んで、敵前で潜水艦の格納庫から出して、組立てだ、試運転だ、カタパルトでの射出だ、帰投する飛行機をデリックで収容して甲板上で分解して格納庫に搬入する。足の遅い潜水艦では自殺的な行動だが、命令であれば従わざるを得ない。飛行機の組立て、発進、帰着、収容の時間短縮のため、血のにじむような訓練を毎日繰り返した。

当初は前記の訓練には１時間半を要したが、連続訓練の結果、出港する頃には３０分で出来るようになった時、軍令部から出撃命令が出た。

爆撃目標は軍需工場等かと思っていたら、目標はアメリカ大陸の森林だという。何故森林を爆撃するのかは、元駐米アメリカ大使館付武官だった軍令部副官の発案で、米西海岸は森林が多く、しかも原始林であるため一番恐れられるのは山火事だからである。一度山火事が発生すると消火のしようがない。熱風が近くの街に吹き寄せてくるので、避難しなければならない住民にとっては真につらいことである。特にシアトル地区に大木がある州政府は、この上空を飛行禁止区域にした。もし飛行機の墜落があって火災でも起こしたら大変だからである。従って敵地の苦手な森林への焼夷弾の投下によって、火災を起こせば効果絶大であるとの説明だった。

また、日本の飛行機が米本土を爆撃したとなると敵の志気を沮喪させる効果もあると言われて勇躍昭和１７年８月１５日に出航する。

米本土に近づくにつれ荒天となり、８日間天候の回復を待って浮上した。直に格納筒のドアが開かれ、８５Ｋ焼夷弾２個が装着済の飛行機がロープをつけて滑走車の上に胴体が引き出され、左右の翼が取り付けられていく。プロペラも尾翼も同時に完備されていく。奥田兵曹は無線機と機銃を装着する。他の整備長や整備士等はカタパルトの発射準備をする。脚とフロートも直に取り付けられ、飛行機はカタパルト上に移され試運転を開始、準備完了。エンジンを全速にすると、先任将校が赤色灯を２～３回廻して下ろすと同時に、物凄い圧搾空気で飛行機が射出される。この間２５分位要したが、非常に長く感じた。

とにかく、滞空時間は４時間。片道２時間で目的地を爆撃するので、羅針盤と時間は操縦担当、目的地の位置確認と後方警戒は偵察担当で目的地上に焼夷弾を投下する。戦果は不明だが予定通り作戦は成功した。

しかし、作戦上の打電は敵に発見される恐れもあるので、打電はできなかったため、発艦させた潜水艦は浮上したまま帰投する飛行機を待っ

ていたことを聞く。

夜は明けて太陽が昇り、敵地がはっきり見える程になったが、機影は見えない。艦上で眼を皿のようにするが、どの方向から来るか分からない。時間的に、もう音が聞こえてくる頃だが？

或いは、お供（米軍機）を連れて帰られたら大変だ。いろいろ予感が横切る搭乗員も、２人のために潜水艦と１００余名の乗組員を犠牲にするわけにはいかない。最高速度２５０Ｋしか出ない両者の焦りは筆舌には表現できない待ち遠しさがあった。

でも、やがてその心配もなく一直線に飛行機は艦の直横に着水する。偵察員は吊上用のワイヤーを出す。追われているようにデリックの下へ急ぎエンジンを停止、偵察員がフックをかける。先任将校が信号の笛をピッピッと吹く。デリックのワイヤーに飛行機は巻き上げられる。飛行機は滑走車の上に下ろされる。作業員はフロート、翼、プロペラと次々と外し、尾翼も折り畳まれ、運搬車にロープがかけられ、レールの上を飛行機はスルスルと格納筒に納められ、重い格納筒のドアが閉ざすと「潜航用意」の命令と共に作業員が急いでハッチから滑り込み、人員確認後艦はどんどん沈下し、６０Ｍで停止して初めて生きた実感が湧いた。戦果は不明だが、これが最初で最後の空襲となる。

本当に行ったの…？と聞く人も居るので、その状況を書きました。

３月１０日　東京大空襲　　木村　光雄

昭和２０年３月１０日は私にとって生涯忘れ得ぬ日です。当時の日本は、第二次世界大戦の末期でありサイパン島の日本軍が玉砕してからは米軍の重爆撃機Ｂ２９の空爆が始まった。

小学生は田舎に疎開、中学生・女学生は勤労動員で工場へ、高校・大学生は徴兵猶予の制度停止によって学徒出陣で戦場への時代でした。私は、大学の１年生で入隊前でした。１学期は何とか講義を受けることが出来ましたが、２学期からは石川島造船所に、学徒勤労動員として旋盤工の仕事になった。

須崎弁天町の遊郭地に大きな「石川島須崎集団本部」と云う看板が立ち、日本大学・国学院大学・拓殖大学の学生３千人が集団生活で造船所に通った。

その内、段々学生達の気持ちも荒んできてトラブルや喧嘩なども始まった。教授も暇なのだから、せめて夜１時間だけでも講義してもらえないかと申し入れたら「この非国民何言うか」と拒否された。その内、妙な緊張感が漂い始め噂が流れ出した。憲兵が入り込んでいる。東條現総理暗殺計画が発覚、近衛前総理と中野正剛（東方会）の信奉者が拓大生の中に居る。それを憲兵が内定しているらしいと囁かれた。

この噂が私の耳に入った途端に、突然３大学の３千名に集団合宿生活解散が命ぜられた。

私は、須崎集団本部に移った時、拓大研究会の私設寮を閉鎖してしまったので住む所が無くなってしまった。やむを得ず、知り合いになったばかりの布施さんに頼み、下宿を探してもらった。そして、同じ寮にいた布留川静雄君と二人で近くの理髪屋の２階に居を移し、石川島造船へ通った。

３月９日は、前日小雪の降った寒い曇り日だった。朝から風邪気味で頭が重かった。今日は１日休んで寝ていようかと思った。

しかし、佃島の埼玉屋へ行かなければ朝・昼・晩の食事がとれなかったので仕方なく造船所に出勤した、そして夕食を埼玉屋で済ませて帰り早々に寝てしまった。その晩も「空襲警報」が鳴っていた。その頃は毎日空襲があり警報が鳴っていたので気に留めず寝ていると、突然階下から大きな声がした。

「学生さん、今日はいつものと違う。早く起きて下さい。」

目を覚まし飛び起きて驚いた。真夜中だというのに昼間のように明るく、前の道路はお祭りのように群集がごった返していた。

同級生の布留川と二人、手当たり次第本などをリュックに詰め込み、表に飛び出した。

須崎弁天町は旧遊郭の街で、東京湾に面しており、一方は高いコンクリート塀、他の二方は広い深い水路に囲まれた街でした。

よその土地に行くには、三つの橋を渡らねばならなかった。群集は西の橋に向かって流れていた。だが、直ぐに西の橋は火が回り駄目、群衆は混乱しながら東の大門の方に流れた。しかし大門も既に火が廻り橋は渡れず混乱が一層ひどくなった。

そのとき、「木村さん!木村さん!」と必死に叫んでいる声が聞こえ、行ってみると布施さんの一家６人が居た。一緒に連れて行ってくれと頼まれた。友達の布留川とは先に逃げろと其処で別れ、年寄りを庇いながら７人で東京湾の岸壁まで追い詰められた。

岸壁からはイナゴの大群のように東京湾に飛び込んでいった。

その時は、あの豪壮な二階建ての建物も燃えだした。火が振りかかって来た。「年寄りでは海に入れない。ここまでありがとうございました、章は男の子です。お願いします。」「いや、海しか逃げ場はない。」と話し

合っていると強風に煽られた炎が襲ってきて、海へ吹き飛ばされた。

泳ぐことも出来ず材木丸太に掴まりもがいていると足が着き立てる処があった。

そこは、岸壁の真下で炎も避ける処だった。そこに１列に並んだ１７～１８人が生き残ることができた。

その時でもアメリカの Ｂ２９が不気味な銀色の四機編隊で焼夷弾を砂町の方に投下して飛び去るのを見ていて口惜しくてこのままでは絶対死ねないと頑張っていた。

しかし人間はこんなに弱いものかと見ているしかなかった。炎が海面を舐め出すと、丸太に掴まっていた人は、皆手を離し浮いてしまった。うつ伏せに或いは仰向けに水面が死体で埋まってしまった。

私の前の背負われていた子供は直ぐ死んでしまった。母親はそれに気が付き背負い紐を解き、私は抱き取り母親に渡した。母親は泣きながら海に流し手を合わせていた。

そのうち海面が首近くになっているのに気付き満潮で沈んでしまうのか諦めかけたが、なんとかそこまでで止まった。

なんとか助かるかなと思ったら、身体が急に寒く水が冷たく感じ始めた。

燃えるものは全て燃え尽き海面は暗くなり震えていると東の空から紫がかった黒い太陽が昇り始めた。やっと生き延び、一列に並んでいた１７～１８人が助け合いながら岸壁に攀じ登って驚いた。

数時間前とは全く違う別の世界が目に映った。動くものは何も無く、昨夜の群集も黒炭のように道路に散乱していた。

一緒に逃げ歩いた布施さん一家の誰も見当たらなかった。

亡き父を尋ねて

小泉　茂

平成９年、日本遺族会主催による中国慰霊友好親善訪問団の一員として、７月１２日より１９日まで東北班２０名を以って北京へ乗り継ぎ、ハルピンから列車にて牡丹江へ。市内視察後、ハルピン市内を視察し、その後空路藩陽へさらに大連に場所を移し各々の地にて慰霊祭を行った。最終日空路北京に戻り北京郊外視察を経て帰国した。

父小泉正平は、母、妻、９歳の子供を頭に５人の子供を残して昭和１８年１０月末、農家の麦まきの多忙の中赤羽を経て満州に出征し、昭和２１年８月１６日吉林省大橋県敦化にて戦病死となっているが、実際のところは、ロシア軍の捕虜となり爆弾始末の仕事中に事故死のようだと当時の慰霊祭において追悼の言葉がありました。

ここで、その報告書に寄稿した文章を紹介いたします。

「本日、ここが、父が死んだ土地であろう地に来ることが出来ました。

思えば５０数年前別れてから幾多の苦しみをお互い味わいながら、地元の皆様に励まされ、また、力強く生きることを教えられて来ました。

父の成された道筋を歩みながら、先祖の残された土地を有効利用にと、昭和４９年野火止テニスクラブを設立し現在に至っております。

モットーは、人と人のふれあいを大切にと、経営をなす中で多くの友人知人に恵まれ１０数年前より上海、北京の元老大会の出場の機会を持ち、また友人に勧められて始めたゴルフで４年前より、北京の国際元老ゴルフ大会に出場し、昨年、一昨年と団長を務めながら、異国の地に眠る父の墓参りに行ってきましたが、今回日本遺族会の慰霊友好親善訪問団の一員として、この牡丹江の地を踏むことが出来ました。父の教えや、私を育てて頂いた多くの皆様に感謝しながら、この６０数年、地域に密着し

て奉仕活動を続けております。

世の為、人の為にと日夜努力を重ね、いくらかでも皆様のお役に立つ仕事が出来れば、ご恩返しが出来るであろうし、またお互い住んでよかったと言われる街づくりをしながら、若い人達を育てて行きたいと思います。

こんな活動を続けていくであろう、私を見つめていてください。

皆んな仲良くやっています。御安心ください。

一吟吟じます。

靖国の宮に御霊は鎮まるも　折々帰れ　母の夢路に

７月１４日　牡丹江にて」

追伸、平成１７年９月７日より１５日に、厚生省の中国東北地区友好訪中団への参加が決定し、今度は８名にて父の死亡、また住んでいたであろう敦化地区の慰霊巡拝は専用車にて市内見学をする予定です。

私の戦争体験

斉藤　喜作

満鉄に働いていた私は、昭和１８年の徴兵検査で「第２乙種」であったが、翌年４月に関東軍に入隊した。関東軍の苛酷な初年兵教育を受け、１０月に「南方総軍に転属」の命を受けて門司港からマニラに向かった。船団は、五島列島沖に待機していた米潜水艦の魚雷攻撃を受け、「アッ」という間に１５隻のうち３隻が各３，０００名の兵員を暗闇の海にもくずにしてしまった。僚船は、全速力で現場から離れたのである。船団は、たびたび台風に遭遇して海水が甲板を洗ったが、「船倉に居ては助からない」と思い、びしょ濡れになって甲板上で寝起きした。

船団は、米潜水艦の攻撃を逃れ、台風をおかして１０日余の後マニラ港に接岸した。私たちが上陸して岸壁を離れると間もなく、米艦載機グラマン編隊が輸送船団に襲いかかってきた。私たちの後続部隊が乗っている船倉に爆弾が命中し、船倉は血の海だったとの話であった。

私は、満鉄で通信技術に携わっていたことから「南方総軍直轄特殊情報部」で、通信機器の整備に当たった。この部隊は、アメリカ機動部隊の交信を傍受して暗号を解読し、これを襲撃させるのに役立てることだったが、レイテ戦での敗北後のこの頃は、特攻（飛行機による）への情報提供が主だったようだ。私たちの部隊は、間もなく比島方面軍山下兵団に編入になった。

ルソン島に、いよいよマッカーサー軍が上陸するというので司令部がマニラから北方の高地バギオに移ることになり、私たちの部隊も翌年１月に移動した。

バギオは、人口数千で、別荘が散在する閑静な避暑地であったが、数万の日本軍陣地と化した。間もなく、リンガイン湾沖に百数十隻の米船団があらわれ、上陸地点とバギオに米戦闘機、爆撃機が連日来襲し、家屋を

ことごとく焼き払ったので、日本軍は防空壕で生活し、砲爆撃を避けることができたが、兵を最も悩ませたのは食糧の欠乏であった。移駐した私たちの部隊は４００余名の将兵であったが、通信傍受の任に当たっていたのは１５、6歳の少年軍属７０余名であった。バギオの近くまで米戦軍隊が迫ったというので、私たちの部隊も４月に撤退したが、この間の２か月余りの間にこの少年軍属たちはことごとく餓死してしまった。少年たちは、防空壕の中で、空になった飯盒を抱いて、誰に看取られることなく息を引きとっていった。また、私たちの部隊の任務も攻撃のための情報収集でなく、連合国の戦争指導の情報収集に変わったため、隊員をつぎつぎと戦闘部隊に転属させ、バギオ撤退時には数十名に縮小してしまった。

上陸した米軍は、豊富な航空戦力に守られた砲兵隊と戦車隊をもって日本軍の陣地を突破し、一軍はマニラ方面に、一軍はバギオを目指して攻め上ってきた。彼らは、日本軍陣地で少しでも動くもの（それは、反撃する兵や砲）がことごとくなくなるまで砲爆撃を加え、焦土と化してから進撃してくるのであった。

バギオを撤退し、アシン川をさかのぼり、キヤンガン渓谷の中腹で終戦を迎えた。当時隊長は大尉で、将兵、軍属あわせて９名の少部隊で、サンフランシスコやデリー放送などによって日本が降伏を申し入れたことを傍受し、その４日後に東京放送によってこれを確認し参謀部にこれを報告した。

私たちは、バギオ撤退以後一粒の糧食も支給されず、現地調達つまり現地住民から強奪せよという訳だった。当初は、山間に棚田が点々とあったが、保有米などはほとんどなく、農民の種籾を強奪した。さらに奥地に入ると棚田もなく、主食は「さつま芋」であったが、日本兵はツルを引抜き、芋を食い、ツルまで食ってしまったので、原住民から激し

い憎悪を受けた。それらを食い尽くした日本兵は「南方シンギク」と称する雑草で餓えをしのいだ。貧農育ちの頑健な私は、マラリヤでの病死や餓死した戦友１０余名の最期を見とどけたが、その氏名は忘れてしまった。

私の古兵（上等兵）が、終戦の４日前、「アメリカに渡って缶詰の研究をする」と言って、部隊を離れた。つまり米軍に投降することを決意した。その直後、日本の無条件降伏。米軍の観測機が飛来して「天皇階下の命により日本軍は降伏した。日本軍帰兵は、原隊に復帰して米軍に投降せよ」と、対地放送した。米軍陣地にたどりつかなかった古兵は、これを聞いて戻ってきた。ところが隊長は、古兵に「日本軍は降伏しても軍規厳正である。敵前逃亡は、銃殺刑だ。ここで自決すれば戦死扱いにする。家族に汚名をきさせるのか」と自決を迫り、ついに決意させた。古兵は自分の死体を埋める穴を掘り、渕に座って、拳銃一発で絶命した。銃創から流れ落ちた血の色が今でも忘れられない。これが軍規だ。

この戦争体験が、８２歳の今日でも「平和を守る闘いは戦争より楽だ」と平和運動に私をかりたてている。

原爆体験記

佐伯　信亮

[はじめに]

昭和２０年８月６日午前８時１５分、一瞬の閃光と共に多くの人の命を奪い、建物はことごとく灰塵と化し荒涼たる街とした。この惨状は筆舌に尽しがたいが、原爆投下から６０年、世はこの記憶が薄れつつある。

原爆を体験し運良く生き延びた私達が、原爆の無残さを後世に伝える責務があると思い・・・筆をとる。

[その時の広島市]

広島市は、大田川を主流とし、市北部より７つの川に分流した三角州の都市であり、清流の川に恵まれた風光明媚の街であった。

また、軍都で、5師団、１１師団等があり兵器廠、被服廠等軍関係の施設が多くあった。そして宇品港からは、多くの兵士が戦場へと出港して行った。

広島市は原爆投下まで焼夷弾も爆弾も投下されず、艦載機による機銃掃射程度であった。

[その時の私]

被爆当時の私の年齢は、満１９才であった。旧制中学（５年制）を戦時繰上げ卒業で、前年１７年１２月に卒業、同級生には志願入した友、少年航空隊（予科練）に行った友もいた。大東亜戦争勃発１年目であった。

当時「国民皆兵」が叫ばれ、特別の理由のある者以外は、皆軍関係、軍需工場への就職であった。私は「帝国兵器」に入社、分工場に配属された。そこは福島川沿いにあり、原爆投下中心地よりわずか西へ１．７キロメートルの所であった。

当時私の父は、中国天津で軍の仕事に従事、二人の兄は入隊、母と姉姪は弟の学童疎開の世話役として郡部に疎開していた。

私は、工場長の家でお世話になっていた。

[閃光]

その日は雲一つない夏の暑い日であった。8時朝礼を終え、私は6尺旋盤に向かい、いつもの様に作業を開始した。

8時15分、魔の閃光が走った。それは写真を撮るときの、マグネシウムを間近から焚いたような、強烈な閃光であった。間をおかずして、工場は倒壊し私の頭上に何かが落下し、打撲で脳震盪となり、意識不明となってしまった。永い時間ではないと思う、回りから「助けて」「痛い、痛いよ」の叫声びで、意識は回復した。

工場は、もと米の貯蔵倉庫を増改築した建物で、構造部材は頑丈で梁にはシャフト、ベルトが縦横に取り付けてあった。これらの下敷きに私はなっていた。どのようにして這い出したか記憶はない。腕ぬぐいしたら血と挨と汗で、袖はべったりと異様な色に染まった。脱出したら既に軽傷の男性4・5人の仲間が救出していた。私も加わった。一人の女性は頭に大怪我をしていた。また、一人は腰に梁が横たわり、皆で持ち上げたが落下物が絡んで救出できない、助けなければ、「鋸を借りて来る」と、私は、道路に出た。

唖然。市中の建物は総て倒壊し、ビルが僅かに残るのみ、「よくもこんなに爆撃したな」と思った。(その時は原子爆弾と言う言葉すら知らなかった)

本社に救援を求めに工場長と私で行くことにし、川沿いの道を南下の途中、空が紫色の異様な雲行きとなり、夕立のような大粒の雨が降り注いできた。この雨をシャワー替わりに顔や衣服の汚れを流した。この雨が後で言う放射能の黒い雨とは知るよしもなかった。

道には、水を求める人、家族の名を呼ぶ人、息絶えた人が多く横たわっていた。何の救助も出来なかった事が、今も心残りである。

福島橋の袂に来たら市外へ逃げて行く人々の長い行列に出逢った。その姿は全身大火傷をし、手を前に突き出し手先から焼けた皮膚が垂れ下がった人、４千度の熱線を受け服はボロボロとなり裸同然の哀れな姿の、人、人、惨、また惨、昨日までの広島の面影はなく阿鼻叫喚の巷と化した。

後日私が生き埋めになった所に戻って、呆然、私の体に落下するはずの梁等は旋盤が支えていた。奇蹟か幸運か、旋盤が私の命を救っていたのだ。大怪我した女性は間もなく息絶えた。翌日近くの学校で茶毘に伏した。

一方腰を傷めた人は、市外の治療所へ連れて行き、２・３日後、様子を見にいったが、そこにはもう姿が無かった。

[うすれゆく記憶]

８月６日の新聞の記事によると、「今、国内外の原爆被害者は２６万人余りで、平均年齢は７３歳を超えた。原爆での死亡者は、広島で２４万人余、長崎と合わせると３７万人余、広島で被爆し原爆慰霊碑に納められた人はこの１年で５千余人」とある。

被爆後終戦となり６０年が過去った。戦争の苦しさと空しさを知らず、まして原爆の恐怖や悲惨を知らぬ世代が大半以上を占めている現在、この文が何かの参考となることを念じつつ筆を置く。

私の戦争体験

児玉　孝一

私は昭和５年（１９３０年）山口県岩国市に生まれました。その頃は大変な不景気だったようです。失業者も多く、一般に貧しく苦しい生活だったそうでラジオも無い家庭が殆どだったと聞いております。

昭和７年（１９３２年）に支那事変が始まり、続いて、昭和１６年（１９４１年)に第二次世界大戦へと突入して行ったのです。敗戦の色が濃くなった昭和１９年（１９４４年）旧制中学三年生の秋から、私達は学徒動員で岩国の陸軍燃料省という工場に動員されて、ドラム缶を作っていました。その時、旧制女学校の生徒も動員されていて隣の工場で我々が作ったドラム缶を洗浄したり、乾燥させて塗装をしていました。が、或日突然、米軍のＢ２９に爆撃されて二名の女学生が亡くなったようです。当時は夫婦以外は男女が共に行動する事は絶対に許されていないので詳しい事は解りません。又当時、軍の秘密が漏れたら大変厳しい罰を受けましたから…

翌２０年（１９４５年）４月からは岩国海軍航空隊に動員されて滑走路の拡張工事に従事していました。そして、その年の７月１３日に悲劇が起りました。その頃はもう度々、米軍の空襲を受けていました。その日もグラマン戦闘機の機銃に襲われ広い滑走路を逃げ廻っていました。航空司令塔からジグザグに逃げろ!!と頻りに叫んでいました。が…

空襲が終わり点呼を取ってみると三名ほど足りません。広い滑走を見渡すと、あっちこっちでうつ伏せになって倒れているのです。おおい!!空襲はもう終わったぞ!!叫びながら近寄ってみると真っ赤な血の海に斃れていました。

一人は脳味噌が飛散って頭が有りませんでした。二人は弾丸が背中からお腹に突き抜け大きな穴があいていました。

軍医と衛生兵が傷口を消毒し、我々は泣きながら遺体の血を拭き取り、白い海軍の整備服を着せて衣服を整え、担架に乗せて小型トラックで御家族の元へお届けした時に、御両親が、何でうちの子だけがと、遺体を抱き締めながら身体を震わせて悲しんでおられた姿が、今でも眼に焼き付いて離れません。

そして、その後、１か月経たない８月６日に岩国から４０ 粁 しか離れていない広島に原爆を投下されたのです。例のピカ！ドン！です。

その日の夕方、あの光ときのこ雲は、広島が爆撃された時のものらしいという噂が流れてきました。当時叔父の家族が広島に住んでいましたので、翌日、母と二人で広島に向かいました。が、爆心地から周囲２０ 粁 以内は憲兵が立っていて、どんなに懇願しても中に入れて貰えません。１週間くらい駄目だ!!というのです。

仕方なく、その日は、とぼとぼと母子で岐路に付きました。

被爆後の１週間は、来る日も、来る日も、被爆者を屋根のない貨車に乗せて、どんどん九州方面に運ばれて行きました。身内確認の為に各駅に１時間くらい停車して見せて下さいました。見ると身体は焼け爛れて赤身が出ていて骨まで見える人もいるのです。夏の暑い頃なので、爛れた赤身の処にウジ虫が湧いていて、もの凄い悪臭がするのです。薬といえば赤チンキ位しか無いのです。皆さん咽が渇くのでしょう。蚊細い声で、水、水を下さいと、おっしゃるのです。水を汲んで来て差し上げようとすると軍医が、馬鹿野郎！貴様あ、殺す気か！！と、怒鳴るのです。すると、あの傷で何処にその力が残っているのか、我々の足首を掴んで殺してください、殺してくださいとおっしゃるのです…。

いっその事、水を差し上げたい心境でした。

いやあ！まさに生地獄です！！

１週間が過ぎ、やっと許可がおりましたので広島に向かい、市内に

入って驚きました。見渡す限り地平線まで焼け野原で、右手遠方に原爆ドームが立っていて、斜め左手遠方に福屋デパートの鉄筋に少しコンクリートの壁がついて残っているのが見えました。立木といえば二米位の高さで黒焦げになり、所々にポツン、ポツンと立っていました。

はっきりした場所は良く解りませんでしたが、この辺りではないかと焼跡に参りましたが、影も形も有りません。唯、黒い灰だけが残っており、一家は全滅でした。但し叔父は南方に召集され留守だったので助かりました。

叔父は養子なもので、姑と嫁が亡くなっていました。又子供が未だ授かって無かったので本当に救われました。焼跡の灰を持ち帰り、仏壇に供え、しっかり御供養させて戴きました。戦後２年位経って叔父は復員して参りましたが、一年位は腑抜けの様な状態でした。

敗戦直後の昭和２０年（１９４５年）９月の終わり頃には米軍が進駐して来ました。その頃はもう日本の軍人は皆除隊となり、残務整理に３、４０名残っていたでしょうか。そうした中、旧海軍が山の麓の大きな隧道に隠していた銃機や爆薬の処理を進駐軍が始めました。米軍の看視の下、その使役に老人や少年が刈り出されたのです。その時は未だ海外に派兵された軍人達は復員していない為、老人や少年が刈り出されたのです。隧道の中から外のトラックまで二人で運び出して積む仕事ですが、なにしろ銃や爆薬が入った箱は相等重いものですから、途中で休んだり、よろけて箱を落としたりしました。当時は食べる物がものでしたから無理もありません。すると、早くしろ！とあのデカイ軍靴でお尻を蹴飛ばして笑うのです。余りの悔しさに…。

その後何日かして、頭が痛いとか腹が痛い、とか云って出なくなりました。するとどうです、警官を連れて一緒に刈り出しに来るのです。日本の刑事が就いて来て同胞である日本人を刈り出す。おまけに最后には

診断書を出せ！と云うのです。

実に情けない思いをしました。　終り

私の８１年

田中　定一

私は大正１３年５月１５日に地元に生まれ、大和田尋常高等小学校に入学し、昭和１４年３月末高等科を卒業しました。

６年生の時に支那事変が勃発したため、世は満蒙開拓団か少年航空兵或いは少年戦車兵、予科練志願の募集が新聞雑誌に大きく取り上げられ、私も農業をやるといいながら心は少年航空兵に憧れ始め中学講義録等を買って勉強し始めた。昼間は農業、夜は夜半まで随分勉強した。たまたま少年航空兵募集の案内を見て親に内緒で志願した。志願しても学科で落ちるだろうと思っていたら合格の採用通知が来てしまった。親に無断で志願したためなかなか採用通知について口に出せず、さりとて日に日に入校の日が迫るため親に心境を話したら、「軍隊のことだから止むを得ない」という言葉に安堵して、昭和１５年１０月１日立川陸軍航空学校に入校を果たした。

当時は朝鮮、台湾、樺太等からも志願して来た。第６期生として七ヶ中隊に編成された。入校後は、時間は厳格で午前中は文官教官により学科、午後は中隊長以下下士官の指導で術科訓練、初歩的訓練から始まり、体操、剣道まで一応軍人としての教養を得て一年で卒業、上級校へ進学。私は、所沢陸軍整備学校へ入校した。同期でも操縦は熊谷、通信は水戸各飛行学校へ転校になる。上級校へ来ても午前中は学科、午後は術科で前校より少しランクの高い教育を受けた。入校後間もなく、１２月８日大東亜戦争が始まり国家総動員令により生活も引き締められ戦争遂行へ厳しくなった。

昭和１７年９月２０日航空記念日に航空隊志願の宣伝も兼ねた郷土訪行が近県の出身者のみ献納された。飛行機で郷土訪問飛行が許可され私も選ばれた。班長の操縦で所沢飛行場を飛び立ち、機は間もなく黒い屋根

のコの字型の大和田小学校の上空に近づくに従い、平林寺大門通り上空より高度を下げ始め校庭上空３００米（メートル）位まで降下した。校庭には「バンザイ」と人文字が書かれ旗を振っているのが見えた。嬉かった。「皆さんありがとう」と何回も叫びながら飛行機は上昇し、翼を左右に振りながら旋回し、また大門通りから降下し児童達に３～４回繰り返しながら所沢飛行場へ戻った。生涯の思い出である。その後８か月間、専門の飛行機整備訓練を受け昭和１８年５月末に卒業し北朝鮮平壌航空隊へ転属。５か月間隊務勤務を経験し母校の所沢整備学校へ出校して後輩の指導中に終戦を迎える。

終戦で帰郷し兄が外地から帰るまで農業を手伝う。昭和２１年４月に兄が北支から帰還し、共に農業を手伝っているうちに近所の人の世話で結婚することになり結納まで終わったが、戦場暮らしで疲れていたのか９月になると胃潰瘍を患い今なら手術して充分治ったと思うが、物不足のため治療もままならず１９日に死亡してしまった。

親は兄の遺言だからと言って結納を取り交わした人との結婚を強く望まれたのでやむなく２１歳で同年１２月７日に結婚式を挙げた。翌２２年１２月２日に長男が産まれた。妻は子に乳をあげようとしたがまだ飲むことを知らず、飲み始めようとしたら「妊婦が丹毒のようだから授乳は駄目だ」と言われ子はやむなく砂糖水を飲ませながら貰い乳に歩き回る。片方の妊婦は闇のペニシリンを買って治療したが、手遅れもあって遂に１２月７日に死亡。結婚してちょうど１年だった。子供は払い下げられた脱脂乳と自家製の摺り粉等を混合して何とか凌いだが栄養不良は免れず、昼夜を問わず泣く日々が続き医者を始めあちこちの祈願も効き目なく困り果てていたら幸手町に名医が居ることを聞き哺乳瓶に温めた乳を懐に、子供を背負って浅草から電車にて行く。車内は買出人で満員である。その中で哺乳をしていたら「可哀相に」と同情してくれたのが辛か

った。でも、そこの薬と指導が良かったのか、日に日に少しずつ元気になったが祖母は苦労したと思う。その後、再婚して一男二女に恵まれたが次女が小児麻痺に罹病（ポリオ予防はなかった）し、妻は入院の面倒から退院後半年間も和光国立病院へ自転車にて通院した。一旦は正常の体に治ったが５才の時再発、咽喉麻痺にて１日で亡くなり妻はかなりショックを受けた。５月に父親、１０月に子供と２回も葬式を出しながらも頑張った。他の子供も高校へ進学しようやく平和的な家庭になる。

昭和４７年市制施行後初の市議会選挙があり当時新座団地に入居して３年目で団地周辺の休耕田で農園指導していた私に是非出馬をとの聲に、自信がないだけに悩んだ末決心した。でも、何とか当選を果たしたが、当選してからというものは、家族全員を議員生活に巻き込むことになり妻は平素と変わらない付き合いをしていても少し気位が高くなったと陰口を言われたりしたため、妻の不満も大変なものでありました。数期務めるにつれ理解と協力で議員活動もレールに乗るようになりました。光陰矢のごとし、１０年、２０年経過する中で議長を３回も務め、無事６期２４年務めました。任期終了後も２、３の公務を任命され、８１才の今も市政のために頑張っております。

私の戦争体験

出嶋　輝子

昭和１４年６月生

私は５、６歳前後の時戦争を知りました。父兄弟３人は兵隊（内地・外地）又一人は海軍で山城にのっていたそうです。フィリッピン海峡で沈没したそうです。

次に昭和２０年前後昼間の事は余りおぼえていません。私達の家族は母３５才、叔母１７才、私５才、次女３才、三女１才の５人の生活でした。夜になり一寝入りすると毎夜の様にサイレンが鳴りラジオでは警戒警報発令の合図です。枕元にシャツ、モンペ、防空ズキンを置き、ねえちゃん仕度するよと子供ながら敏感になっていました。ねえちゃんは三角形の白い電気の傘に黒い布を巻きつけて外にあかりがもれない様にしました。もれていると敵にやられるからです。私は雨戸のフシ穴から外をのぞくと空はなんとも言えない明るさ。B２９がもえたり照明弾がおちてきたり銀紙の短冊の様にパラパラおちてきました。また、畑の前に松林がしげっていて、そこに艦載機が偵察に何機も来ていました。この様な日が三日間位続いていました。

残り少ない人生二度と味わいたくなく平和で送りたいと思います。

東京大空襲を生きのびて

保坂　正夫

東京荒川区尾久町に住んでいた私は、小学３年生、１９４５年（昭和２０年）３月１０日未明、東京大空襲にあいました。

母と姉、兄妹の８人で、燃える火の海の中を炎のない方向を探して必死で逃げました。荒川の対岸に橋を渡ろうとすると、警察官が「渡るな」と叫んだ。しかし、逃げる人があとからあとから続き、誰彼となく警察官を川に突き落とし、橋を渡った。

そこは、家もない河川敷であった。川の中には焼けただれた生きている人、死んでいる人の身体がたくさん浮いていた。それでも家族が別かれる事なく、一緒に行動していたので生き延びた思いをかみしめた。

次の日住んでいた家に戻って見ると、すべて焼けこげて何もなく、焼け野原であり遠くまで見える。

山の手線の田端駅や上野駅のホームが見える。東京では、一般の人々が数十万人死んでいる。そして、広島、長崎へ原爆投下をされ終戦となり、これで３２０万人の命が失われ、アジアでは２，０００万人が侵略戦争で犠牲となった。

戦後６０年、靖国神社参拝、憲法９条を変えようとする動き、再び戦争をする国にさせない為に、あの戦争で失われた命から教訓を引き出すべきではないでしょうか。

Ⅱ メッセージ

私が平和について思うこと

陳　萍

日中戦争から６０年が経ちました。緊張している今の日中関係は、ある意味では、平和ではない状態が続いています。これからお互いにどう向き合い、どのように仲良く付き合って行くのか？

これは私達にとって一人ひとりの２１世紀の課題として考えなければならないと思います。

６０年前、中国と日本の間、確かに一時的な不幸な過去がありましたが、戦後、それを埋めるために７０年代に私達の前輩で中国と日本の指導者、両国の国民の努力によって、日中国交正常化を実現させました。お互いに許し合い、それぞれの文化を尊重し、歩み寄ることと未来志向でお互いに努力すれば平和と友好の関係を築けると思います。ここでは中国の偉大な人だった周恩来首相のお言葉を引用させて頂きます。日中関係について、３０年前に周恩来首相は、このようにお述べになりました。“過去は過去としなければならない、それを若い世代に受けついではならない。”私達はこのような寛大の心を持って付き合って行けば摩擦や争うことなく、平和な道が必ず開けると信じます。“一衣帯水”の隣邦として私達皆が日中友好のかけ橋になって、平和の願いを果たして行きましょう。

平和について思うこと　　中学２年生　浦川　未早

今、私達日本人はとても快適な生活を送っています。しかし昔は、広島や長崎に原爆を落とされ、人々がとても苦しみました。

そこでこれからの日本は、世界の国々との友好を深め、平和な世界にしてほしいと思います。そして、もう二度と戦争の起こらない、楽しい国になっていけばいいと思います。

平和について　　中学２年生　斉藤　のどか

私たちは普段、朝食を食べ昼食を食べ、夕食を食べます。おやつなどの間食を食べる人も多いと思います。しかし、世界に目を向けてみると、朝・昼・晩の食事さえもできない人々も多いです。私たちくらいの歳で戦争に行く人もいます。私たちにとってあたりまえのことができないのは、本当につらいと思います。『平和』はとてもいい事だと思います。

戦争はだめっ！

小学２年生　鈴木　千陽

６０年前に、原爆が落とされました。その中には広島もありました。広島に原爆を落とした時のことを、テレビでやっていました。私は、パパとママと私で見ました。

旅館をやっていて、お父さんもお母さんも死んでしまって、一番下の弟と真ん中の女の子と、もうひとつ上の女の子と、一番上のお姉ちゃんと暮らしていました。広島に、原爆が落とされると分かった日、沖縄に行くことになった弟は、沖縄での戦争の戦いに行くために、機関車に乗って行ってしまいました。でも真ん中の女の子は先生をやっているので、行かなくてすみました。お姉ちゃんの彼氏が行ってしまいました。だけど一日早く、帰ってくると決めました。

でも、１０分前ぐらいに原爆を落とされてしまったのです。その男の人がそこに帰ってきた時、旅館の入口にあった石だけが目立っていました。一番上のお姉ちゃんは、黒焦げになる前にとけてなくなってしまいました。残ったのは、お姉ちゃんが寄りかかっていた石に、お姉ちゃんが座っていたように、影がくっきり残っていました。真ん中の女の子は、焦げてなくなっていました。そのひとつ上の真ん中の女の子は、原爆ドームの一部が自分の上に、落ちてきて死んでしまいました。一番下の男の子は、分かりません。

このテレビを見て、改めて、戦争はだめっと思いました。その戦争をしてから本当にアメリカは、日本に爆弾を落とさないで他の国から守ってくれるのか、本当に守れるのかが、心配です。これから戦争がないように祈るしかないので、私は祈ります。

平和について　　小学３年生　石岡　大昌

夏休みに、いろんな戦争のテレビを見ました。なんで戦争をするのか分かりません。爆弾や鉄砲で多くの人が死んでます。やめてほしいです。どの国の人も、楽しく笑ってくらせたらいいと思います。

私が平和について思うこと　　小学３年生　斉藤　勇大

ぼくのひいおじいちゃんは戦争でなくなりました。もし戦争がなかったら、ひいおじいちゃんに会えていたのかな。世界中でおきている戦争。今も苦しんでいる人がいる。きっとぼくが思う様に、もし戦争がなかったらって思っている人がいると思う。ぼくは、ぼくがもっている全ての勇気を出して平和を守りたい。ひいおじいちゃんも喜んでくれると思う。会いたかったよ、ひいおじいちゃん。

私が平和について思うこと　　小学３年生　武本　明花里

私には、自閉症のお兄ちゃんがいます。私にとてもやさしくしてくれるお兄ちゃんが大好きです。

でも、中にはお兄ちゃんや、同じ障害をもった人をいじめたり、ばかにしたり、じゃま者あつかいする人がいます。でも、お兄ちゃんたちは、いじめられている意味がわかりません。だから、見ている私はとてもつらくなります。どうしたら、みんなお兄ちゃんたちにやさしくなるのだろうと、いつも思います。

みんな顔がちがうように、いろんな人がいてもあたり前だと思います。だから、障害のある人がいても、やさしくしてほしいと思います。みんなが思いやりをもてる世界が、私にとっての平和です。

平和についての願い　　小学３年生　山本　夏寧

新聞やニュースで毎日悲しい事件が多く、私も家でお姉ちゃんと兄弟喧嘩をよくしてしまいます。

お盆にお坊さんがおじいちゃんの家に来た時に、「ゆずり合いの気持ちでいれば喧嘩になりません。」とおっしゃっていました。

世界じゅうの人々が優しいゆずり合いの気持ちで戦争や争いのない平和な地球にしていけたらいいなぁと思います。

平和についての願い　　小学４年生　福島　翔

昔は今とちがって戦争が行われていました。日本では赤い手紙がくると男の人は戦争に行かなければならないのです。ぼくは、その時代に生まれなくて良かったなと思います。戦争に行く時に女の人達が手を上げて「ばんざい」と言うのです。ぼくはなぜそんな事を言うのかなと思います。ぼくは、今でも戦争はしてはいけないんだなと思います。平和な世界がずっと続けばいいなと思います。

戦争のない平和な世界に　　小学４年生　三代澤　憲伸

戦争は、大人の欲のためにおきる。犠牲になるのは、いつだって子どもだ。だからこそ、子どもだって平和のための努力をすべきだ。それには、子どものころから世界の人々とふれ合い、楽しく世界の歴史や文化を学ぶことが大切だと思う。

大人は子どもに、いい見本になるように。子どもは、自分で善悪を判断できるかしこい知識を身につけることが必要だ。

ヒロシマの有る国で

小学４年生　弓座　まなつ

私は合唱で「ヒロシマの有る国で」という曲を歌ったことがあります。私はこの歌を歌ってから、原爆のこわさや命の大切さを知りました。

広島や長崎に原爆が落とされ多くの人々が亡くなったこと、生き残った人の姿はとても醜かったことなど原爆の話をたくさん聞きました。その話を聞いて私は、とても悲しくなりかわいそうだと思いました。

またこの歌は、私に「人の生命は同じ」と言うことを教えてくれました。改めて私は、「人の生命は、なんとなくなんかじゃない。みんな、やるべき事があって、生まれて来たんだ。」と思いました。この歌は、私に色々な事を沢山教えてくれました。そして、私は思いました。なんで家族と暮らすことも許されない戦争が、なぜ今も起きているのか。沢山の人々が苦しむだけなのに。私には、よく分かりません。

皆の命が同じように大切なはずなのに。

私は、戦争がない、平和な社会になればいいなと思いました。

Ⅲ　俳句

征きし身に賜る余生終戦日
敗戦日父より古き兄の墓
軍帽のなほ捨て切れず敗戦日

池谷（いけたに）　英夫（ひでお）

新月や子を抱く母のやさしき目

石原（いしはら）　恵美子（えみこ）

炎昼や一家被爆の墓ならぶ
ひとたびは失せし被爆の髪洗ふ
還暦も古稀も彼方に秋の声

浦川（うらかわ）　宏志（ひろし）

こけし工房首キュッと入る秋うらら
菊花展小学生の区長賞
日の匂ひ残す布団の子の寝顔

大沢（おおさわ）　志織（しおり）

永遠に変わらぬ平和雲の峰

鯉川（こいかわ）　武英（たけひで）

近詠（生きる）

戦火知る樹も知らぬ木も花終る
初恋も子育ても遥かなる端居
風鈴の音色に過去がほどけゆく
今日確と生きる手応へ秋耕す
我が秋思（しゅうし）消しゴム等では消えぬ過去

高麗（こま）　実（みのる）

生かされて祈る平和を原爆忌
語りつぎ風化させまじ終戦日
原爆の図恐ろしや流灯す

小山　泰子

菊水の旗秋風に挙手の礼

下田　セツ子

蜩やさけぶ声なき爆心地
秋彼岸若き軍服セピア色
爆心をかたる老母や夏の空

高草木　一子

炎天下玉砂利に伏す民の群
空襲に焼け落つ我が家五月空
終戦日あの日背なの子今停年
螢二羽兄の御霊か去りやらず

高橋　道子

爆心地青桐二世蘇る
明くる年カンナは咲きし爆心地

田口　正子

語り部の背の丸さや終戦忌
反核の人の輪和となす雲の峰
核廃の志を継ぐ誓い日々草

田村　もも子

被爆から六十年目の夾竹桃
爆心地変わらぬ流れ大田川
春の朝三十八度線遠く見え

津谷　謙弍

夏空をゆく休養のパスポート
老鶯や余生を通ふ学生証

並木　万佐子

予科練の血は残りゐて終戦日
翼振って夏空に消ゆ特攻桟
夏帽を振って別れし戦友のこと
夏の日や「われ突入」の電波消ゆ

松岡　香月

原爆忌あゝナガサキの天主堂
終戦の詔聴く十五歳
敗戦や焦土の街を彷徨へり
敗戦忌軍国の子等白頭に
終戦日六十路の今日も蝉しぐれ

水田　一芙

新緑や駆けくる大きランドセル
夏めくやガラス戸に透く児の指紋
水浴びのやがて大胆四十雀

山形　れん

小学2年生　原田（はらだ）　工夢（たくむ）

あげたいな白いごはんを世界中
ホタルさんすんでほしいなさい玉に

小学3年生　石岡（いしおか）　大昌（ひろまさ）

あおいそらみんなのねがいいつとどく

小学4年生　大塚（おおつか）　淳平（じゅんぺい）

せんそうはいのちをうばうこわいもの

小学4年生　垣澤（かきざわ）　稚奈（わかな）

せんそうはぜったいしないやくそくだ

小学4年生　白塚（しらつか）　湧士（ゆうし）

にっぽんのへいわをねがうぼくたちは

小学5年生　小澤（おざわ）　昂世（こうせい）

埼玉の未来空気はきれいでゴミはゼロ

小学5年生　高橋（たかはし）　柾哉（まさや）

ゴミがなくきれいな都市は埼玉だ

小学5年生　田所（たどころ）　友洋（ともひろ）

さいたまのはなやみどりがさきほこる

小学６年生　岡嶋（おかじま）　裕也（ゆうや）

手をつなぎ戦争なくそうみんなの国

小学６年生　新田（にった）　幸菜（ゆきな）

いつの日かぼうはんグッズいらないね

小学６年生　森田（もりた）　翔平（しょうへい）

世界中心の国境なくそうよ

Ⅳ　短歌

小泉（こいずみ）　茂（しげる）

雑詠

吹き荒る日の過ぎたれば雨降りて
春菜の種子を落としたり今日

自らの苦しみ逃れ酒宴に
一人放恣の歌をうたへり

家族らの話の間に思いけり
獨りの夜の歌読むときを

退院せし母を喜びおとづるる
人おおくなりて麦秋は過ぐ

夫がもしや生きてゐるかと在ソ抑留者
名簿発表の朝刊を見る

（「昭和萬葉集　還らぬ人々」掲載）

故（こ）　小泉（こいずみ）　正平（しょうへい）

雑詠

床に入るや直ちに眠る父あはれ
六十路越して働く父は

庫裡いて聞く水音のさやけさを
庭を流がるる野火止の水

伍長勤務上等兵たる其の友は
姿勢正しく立ち手話すも

父母は共に六十路を半ばなる
今年の春をとみにおとろふ

兎に角も先づ増産と農民は
空を見あげて立ち上がるなり

並木（なみき）　清子（きよこ）

ふる里の鎮守の森は照り映えて
獅子舞ひ踊る生あるを謝す

猛暑なほ我が世の春と鳴き交す
ミンミン蝉は緑の内に

あらそいは心にきずをのこすだけ
つづくといいな平和な未来

小学3年生　伊原（いはら）　凛（りん）

人々がつらさこらえたあの日から
近くて遠い六十年

小学6年生　齊藤（さいとう）　雄也（ゆうや）

花畑悲しみやすらぐその場所で
手足がなくなる地雷の悲しみ

小学6年生　吉野（よしの）　咲（さき）

V　新座市平和展実施結果

Ⅴ　新座市平和展実施結果

１　名　称　　「新座市平和展」-新座市の歩みと原爆の悲劇-

２　日　時　　８月２日（火）～１５日（月）午前１０時～午後９時３０分
（最終日は午後５時まで）

３　場　所　　生涯学習センター３階ギャラリー１・２

４　概　要

「新座市の歩み」及び「原爆の悲劇」という２つのテーマの展示をした。

「新座市の歩み」については、市の年表、市民からの公募写真、歴史民俗資料館所蔵の戦中・戦後の生活用品の写真、「原爆の悲劇」については、長崎原爆資料館から借用した写真パネルを展示した。

また、友好姉妹都市提携を結んでいるドイツ連邦共和国ブランデンブルク州ノイルッピン市から寄贈された版画、日本降伏の宣伝ビラの写真、中央図書館所蔵の戦争に関する本などを展示しアンケートも実施した。

⑴　新座市の歩み

ア　目で見る市の歴史

新座市の年表と主な出来事の写真３７枚をＡ４版に拡大して展示した。

イ　公募写真

写真提供者	主な写真
新沢（しんざわ）　正禎（まさよし）　氏	昭和３０年代の新座市の風景　ほか
田中（たなか）　定一（さだいち）　氏	昭和３０～５０年代の新座市の風景、里神楽　ほか
田中（たなか）　利雄（としお）　氏	東京オリンピックの風景　ほか
中澤（なかざわ）　節子（せつこ）　氏	満州の年表、地図、中国の写真　ほか
並木（なみき）　勝司（かつじ）　氏	昭和３０～４０年代の新座市の風景ほか

⑵　原爆の悲劇

長崎原爆写真パネル

原爆投下後の惨状を写したパネル３８点

⑶　その他

ア　版画

新座市と平成１５年度に友好姉妹都市を提携したノイルッピン市から寄贈された日露戦争の版画

イ　日本降伏の宣伝ビラ（実物は新座市歴史民俗資料館に所蔵）

１９４５年にアメリカ合衆国大統領ハリー・Ｓ・トルーマンによって書かれた日本降伏の宣伝ビラの写真

ウ　戦中・戦後の生活用品

新座市歴史民俗資料館で所蔵している戦中・戦後の生活用品の写真

エ　戦争関係の本

中央図書館で所蔵している戦争に関する本

５　結　果

来場者数１，３９９人

6　新座市平和展展示風景

⑴　新座市の歩み

ア　目で見る市の歴史

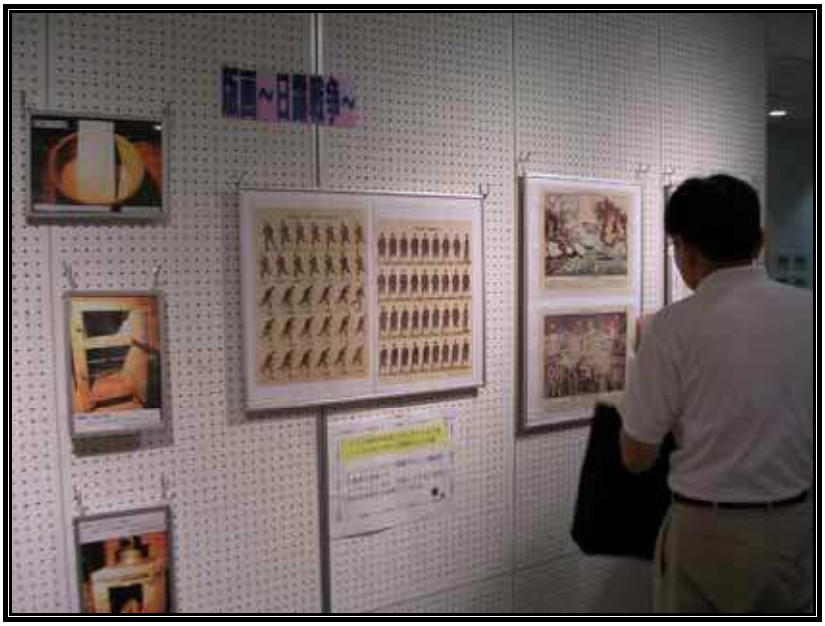
イ　公募写真

⑵　原爆の悲劇

長崎原爆写真パネル

⑶　その他

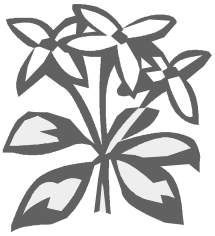
ア　版画



イ　日本降伏の宣伝ビラ

ウ　戦中・戦後の生活用品

エ　戦争関係の本

発行　平成17年12月
編集　新座市企画総務部企画課
〒352-8623　新座市野火止一丁目1番1号
TEL　048-477-1111（代表）

「戦後６０年・市制施行３５周年記念　戦後６０年の願い　～私たちの記憶の中の戦争～」は、新座市障がい者就労支援センターで、就労に向けて実習をしている人たちが製本しました。